

# 田辺城跡検出石垣の再検討

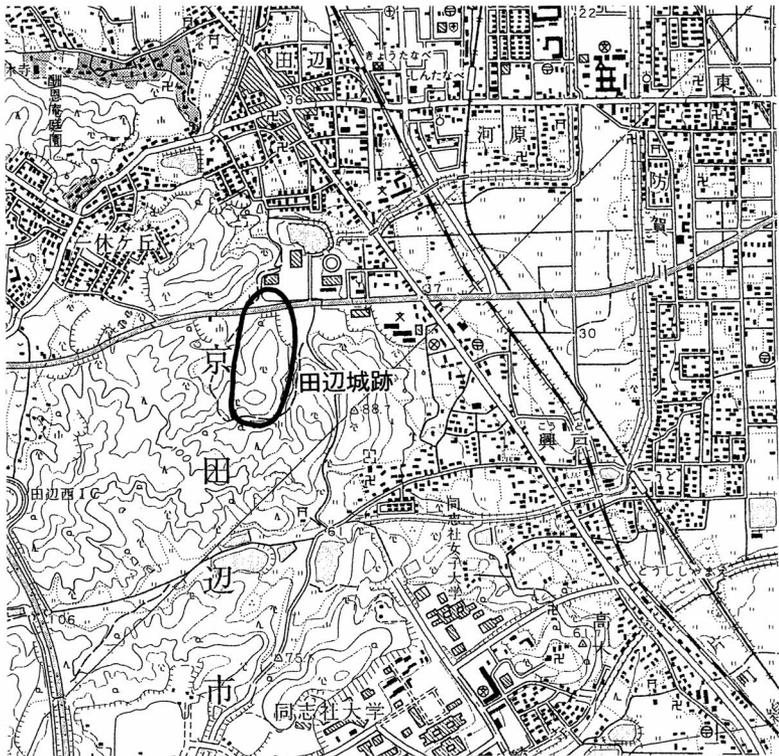
石尾政信・引原茂治

## 1. はじめに

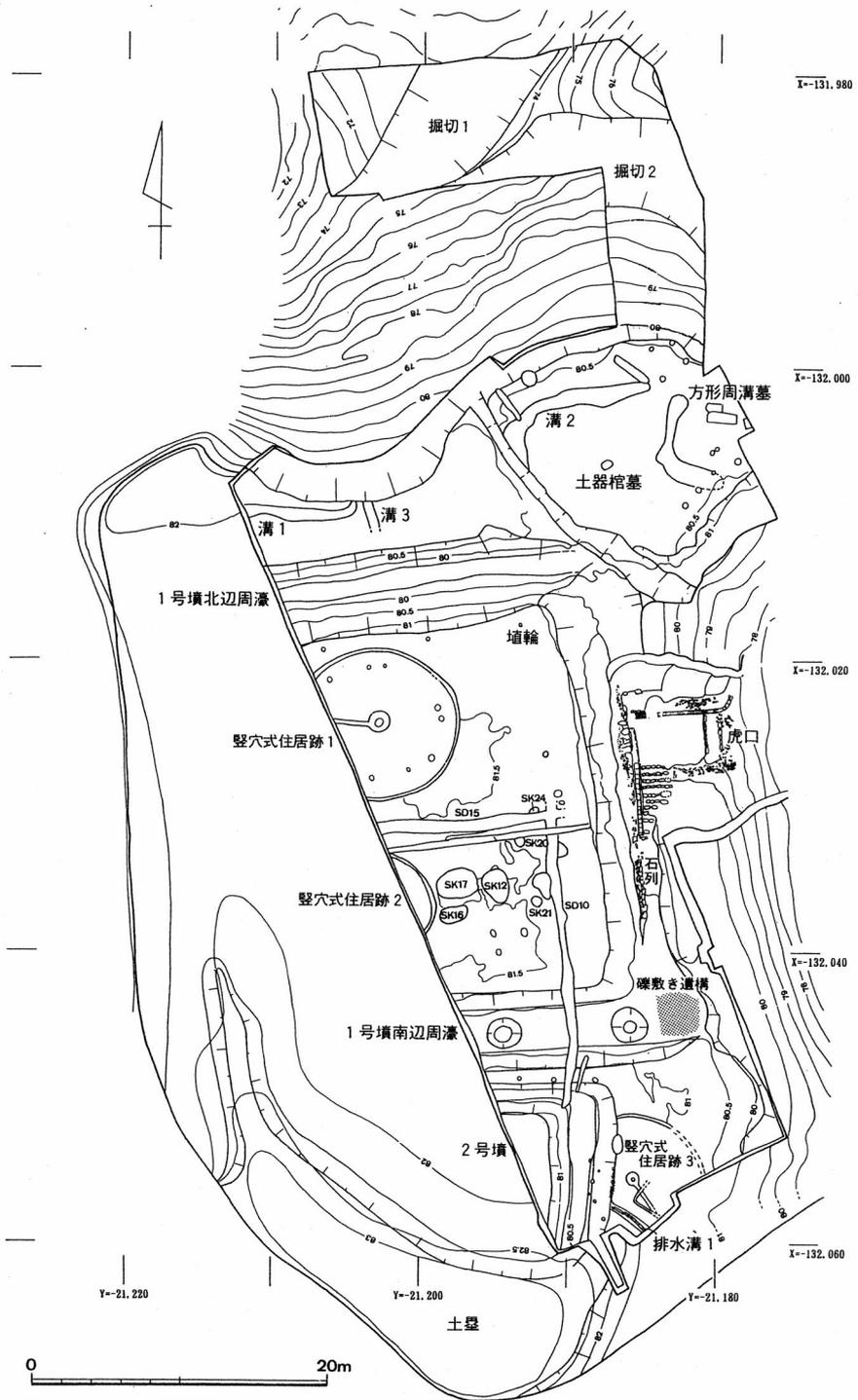
田辺城跡は、京都府京田辺市田辺奥ノ城・円山に所在し、木津川左岸の南西から北東に延びる丘陵に位置する。南北約300m・東西約40～140mの範囲に、3か所の平坦地を連郭式状に造り出している。かつて、この丘陵の北東端部にも2か所の平坦地があり、田辺町教育委員会による調査で、建物跡や土坑などが検出されている。<sup>(注1)</sup>

1996年に、府道八幡木津バイパス建設工事に伴い、3か所の平坦地のうち最も北側に位置する平坦地の調査を実施した。この平坦地は、南北約60m・東西約40mであり、北東側に約15m四方の一段低い小平坦地が張り出す。平坦地の南西部分には、約1mの土塁状の高まりが観察できる。調査対象地は、この平坦地の東半部である。

この調査では、弥生時代中期の高地性集落に伴う竪穴式住居跡や方形周溝墓、古墳時代中期～後期にかけての方墳2基などを検出している。方墳2基については、田辺奥ノ城1・2号墳と名付けた。このうち、1号墳は一辺約



第1図 田辺城跡位置図(1/50,000)



第2図 田辺城跡遺構平面図

36 mの規模をもつ。主体部は後世の削平のためか残存していなかったが、埴輪等が多数出土した。中世の遺構としては、溝・土坑・石敷き遺構・石列・堀切・瓦質土管を使用した暗渠排水溝・舁形虎口状遺構などを検出している。また、古墳の周溝等を通路や水溜などとして巧みに利用している様子も確認している。この調査については、すでに概要報告<sup>(注2)</sup>しており、内容については、それを参照していただきたい。

中世の遺構の内でも重要なものは、舁形虎口状遺構である。この遺構に伴う石垣は、中世に遡るものとして、調査中から各方面の注目を集めてきた。今回は、この舁形虎口状遺構に伴う石垣の築造時期について再検討を試みたい。

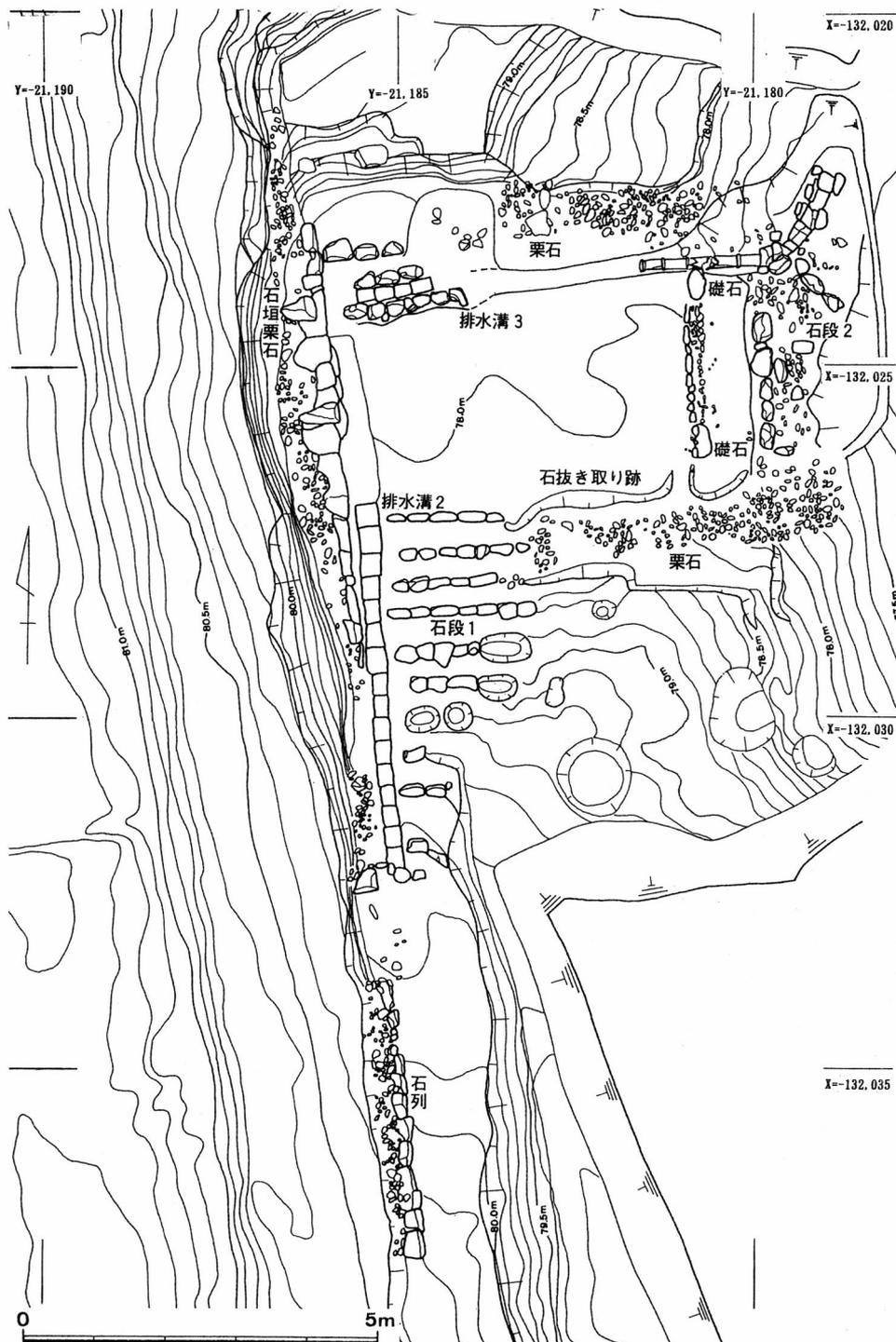
## 2. 舁形虎口状遺構と石垣

①舁形虎口状遺構 調査対象地の東側斜面で検出した。斜面を削平して東西約5 m・南北約3.5 mの平坦地を造成し、その正面(西面)に石垣を築く。その石垣に沿って南側に上部へ上る石段を設ける。平面的には、まさに左折れの舁形構造を示す。石垣と石段の間には、底部に平瓦を敷き側面を割った平瓦で護岸した排水溝が設けられる。石段は、最も残りが良い部分で幅約2.1 mを測り、自然石が7石並べられる。

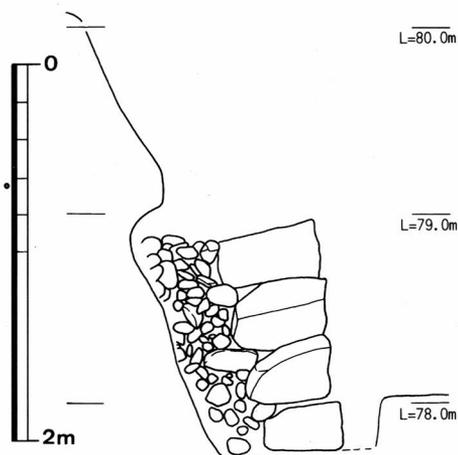
南北両側面にも石材抜き取り痕跡や裏込めの栗石とみられる角礫が散乱しており、元は石垣があったものと考えられる。平坦地東側には、門の礎石とみられる平石がある。なお、この平坦地には、上下2面の整地面が認められる。平石は、上面の整地層およびその東縁部に一直線に並べられた拳大の角礫に約半分覆われており、下面の整地面に伴うものと考えられる。また、北側面で、底部に平瓦を敷き側面を石で護岸した排水溝を検出したが、この溝は上面の整地層によって埋め戻されている。この溝の東延長上で瓦質土管5本を埋設した暗渠排水溝も検出している。

②石垣 上記のとおり、舁形虎口状遺構の正面に東面して築かれている。地上部分で2～3段の石積みが残存する。石材は石面をそろえて平積みされる。1～2石毎に横目地を通して様子である。傾斜角度は86°前後で、ほぼ垂直である。石材の尻に介石状の石をかませて角度を調節する。石材には、自然石と花崗岩の割石が用いられ、花崗岩には矢穴が残存するものがある。なお、自然石には黒色系のものが用いられており、白色系の花崗岩と対比させて、装飾的な効果を意図していることも推定される。石材の大きさは、約0.2～0.8 mと、あまり大きいものは使用していない。

裏込めには自然礫を使用する。裏込めは、約1.5 mの高さまで残っており、この石垣はその高さ以上に積まれていたと考えられる。上部平坦地の縁辺までは約2.5 mあり、最も高い部分ではほぼその高さまで積まれていたものとみられる。地下部分には、ほぼ1石の根石



第3図 舂形虎口状遺構平面図



第4図 石垣断面図

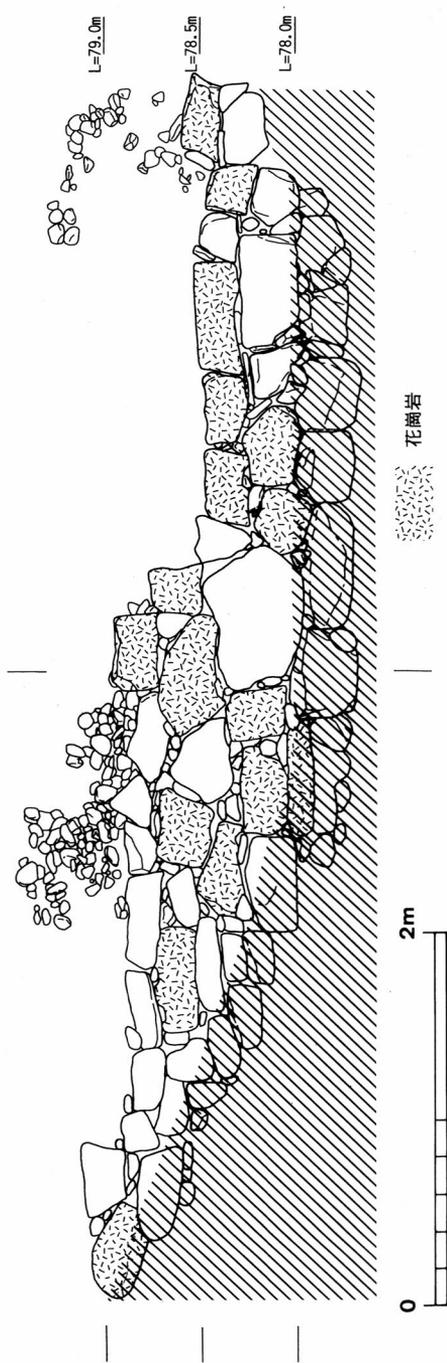
が据え置かれている。地上部の石積みのような石面を揃える意図はみられない。

### 3. 関連する出土遺物

中世に関連した出土遺物には、溝から出土した土師器皿・土師器羽釜、包含層や土坑から出土した瓦質播鉢・瓦質香炉・備前焼播鉢・白磁・瓦、土塁に設けられた暗渠排水溝に用いられた瓦質土管などがある。舂形虎口状遺構や石垣に関連する遺物としては、その埋土から出土した軒瓦を含む多量の瓦類・瓦質香炉、石垣と同時期に造られた暗渠排水溝に使用された瓦質土管などがある。

土師器羽釜は、大和型のもので、器壁が薄く精緻な胎土で淡黄褐色を呈し、体部最大径付近に鏝が付く。口縁部を強く外反させ口縁端部を内側につまみ上げる。16世紀中葉～後半（第3四半期）に相当するものであろう。瓦質播鉢も、大和型のもので、口縁端部の形状などから、同時期のものであろう。

軒丸瓦は、内区が左巻き巴文で、巴頭がやや尖り気味で尾が長くのび、外区に珠文を密



第5図 石垣実測図

に配し、丸瓦部の凸面にヘラミガキを施すものである。同種類で瓦当が剥離したものに、丸瓦端面にキザミ目を付けたものがみられる。これらは、舁形虎口状遺構埋土から出土した。内区が左巻き巴文で、巴頭が大きく尾が長くのびるものが土塁近くで出土した。

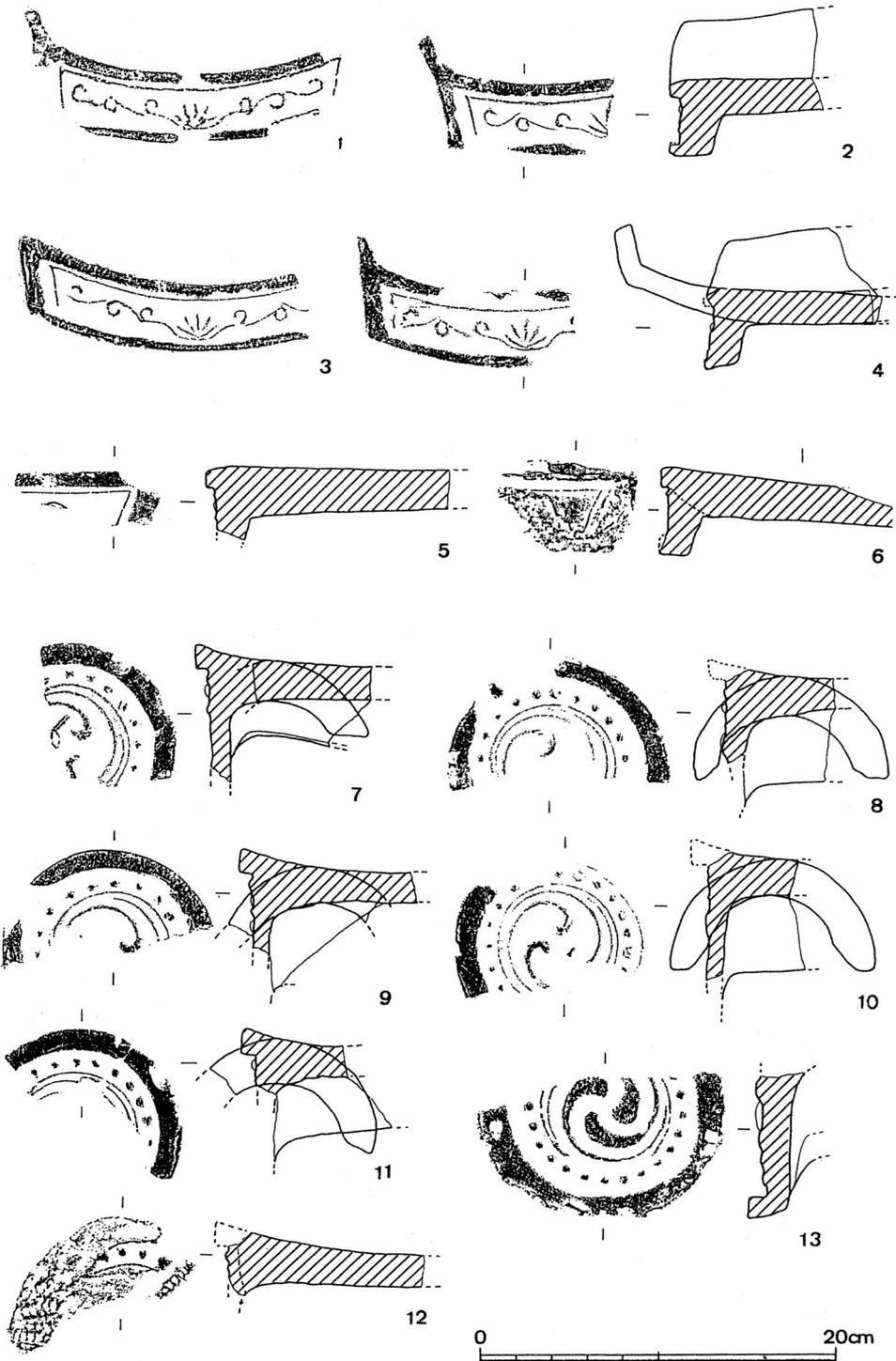
軒平瓦は、内外区の境界の界線が下を除いてめぐり、中心飾りに五弁の菊花状紋様を配し、主葉だけの唐草が3回反転するものである。唐草は、中心飾りの下で繋がり、中心飾り・唐草ともに線が細い。全体が明らかでないものもあるが、これらは懸瓦として作られ左右に鱗が付く。1点だけ平坦地北方斜面の土木工事中に採取したが、それ以外は舁形虎口状遺構埋土から出土した。

丸瓦は、凹面に滑り止めが付くもの、粗い吊り紐痕跡のあるもの、長円形の押さえ痕跡のあるもの、角材による内叩き痕跡のあるもの、滑り止めが付き内叩き痕跡のあるものなどがある。

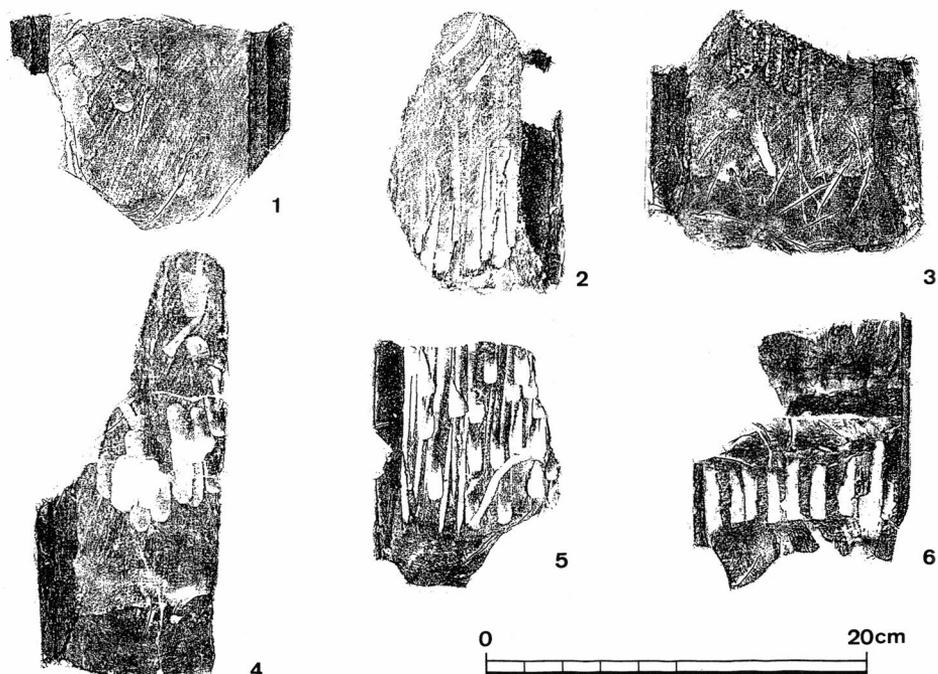
法隆寺資料から田辺城跡出土瓦に関する項目を抜き出すと、以下のとおりである。<sup>(注3)</sup>法隆寺では、軒平瓦の内・外区の境界の界線が15世紀で消失し、滑り止め瓦が一般化する。15世紀後半に軒丸瓦凹面に楕円形の内叩きが出現する。16世紀前半に丸瓦広端面や凹・凸面に瓦当接合用キザミ目を付けはじめる。この時期には、丸瓦凹面に長めの内叩きが出現するが粗く、角材による内叩きが一般化し、凹面全体だけでなく玉縁寄りだけ短く叩くことがある。

田辺城跡出土軒平瓦は15世紀の様相を残すが、唐草が細く単純であるため、16世紀前半まで下がる可能性がある。出土軒平瓦に先行するとみられる紋様構成の軒平瓦が法隆寺から出土している。また、よく似た紋様構成の軒平瓦が勝龍寺城跡から出土している。出土軒丸瓦の瓦当が剥離した丸瓦の接合部分のキザミ目や丸瓦凹面の内叩き痕跡から、16世紀前半まで下がる可能性がある。

暗渠排水溝に使用していた瓦質土管は、粘土紐を積み上げて作る土管専用品である。内面を指押さえの後ヨコナデ、外面を縦ハケの後ナデを施し、黒灰色ないし淡黄褐色を呈する。片方に屈曲する受部があり、その反対側がやや広がるものがある。製作技法がほぼ同じで法量が酷似する土管専用品が、奈良市古市城跡から出土している。<sup>(注4)</sup>大和の土管形土器Ⅱ類に相当する。<sup>(注5)</sup>古市城跡城山地区の調査では、中世墓地を壊して城を造っており、溝の一部が暗渠になった場所に瓦質土製管が使用されていた。中世墓地には大和型羽釜を蔵骨器として使用したものがあり、被葬者の没年号と思われる紀年銘を墨書したものがある。蔵骨器の紀年銘のうち、最も新しいものが「大永□(三?)年(1523)」で、16世紀前半まで墓地であったことがわかる。これにより、城跡に関連した溝に使用された瓦質土製管はそれ以降のものと判断できる。瓦質土管専用品は16世紀中葉以降の所産といえよう。

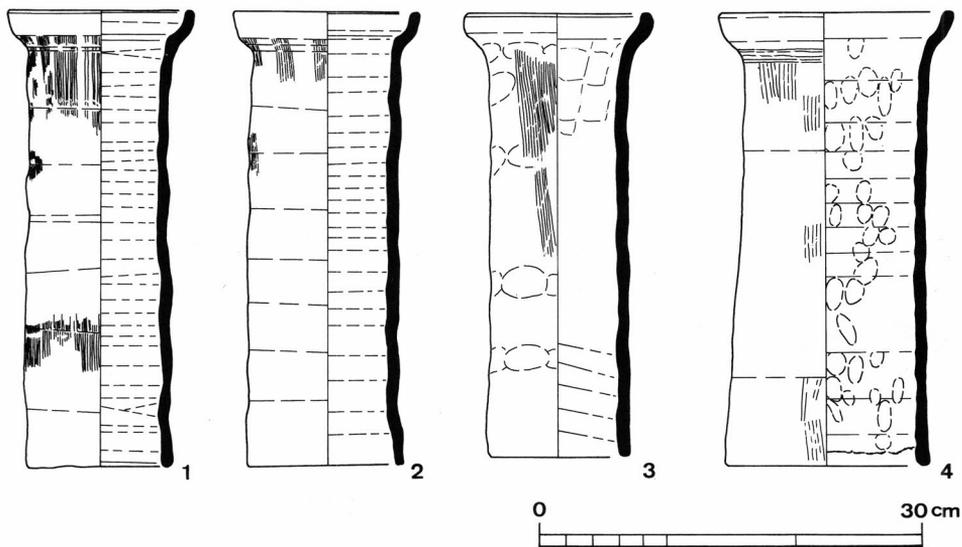


第6図 田辺城跡出土軒瓦実測図・拓影 1～6：軒平瓦  
7～13：軒丸瓦(6は工事中に採集、13は南端土墨北側出土、他は舛形虎口状遺構出土)



第7図 丸瓦凹面拓影

1・3・4：楕円形・長円形内叩き 2・5：長めの叩き 6：角材による内叩き



第8図 瓦質土管実測図

1・2：古市城跡出土 3・4：田辺城跡出土  
 (古市城跡出土瓦質土管は報告書から再トレースしたものである)

#### 4. 室町時代後半期の石垣

今回検出した石垣は、いわゆる室町時代後半に築造されたものと考えられる。この時期に築造された石垣が、各地で確認されている。

##### ①京都市慈照寺(銀閣寺)<sup>(注6)</sup>石垣

東山殿庭園の石組溝に伴う石垣である。石材は、自然石と花崗岩の割石を使用しており、割石には矢穴が残存するものがある。ほぼ垂直に積み上げられており、横目地を意識しない乱積みである。15世紀後半の築造とみられる。

##### ②大阪市四天王寺<sup>(注7)</sup>石垣

四天王寺旧境内遺跡の東辺で検出された。石材は、六甲山系の花崗岩の割石が多く、矢穴が残存するものもある。横目地を意識した石積みとみられ、石材を平積みする。裏込めには拳大から人頭大の自然石を多量に用いている。16世紀第2四半期の築造と考えられている。

##### ③福井県勝山市白山平泉寺跡<sup>(注8)</sup>石垣

南谷坊院跡で検出された石垣は、隅角部は石材を縦積みする。築石部は乱積みに近い積み方で、石垣の勾配は垂直に近い。石材の中には、矢穴が残るものがある。石による裏込めはない。

本殿前の石垣は、隅角部に巨石を縦積みし、築石部には巨石の平積みが見られるが、横目地の意識はなく、乱積みである。勾配はほぼ垂直である。

これらの石垣は、16世紀中葉頃の築造とみられている。

##### ④福井市朝倉氏一乗谷遺跡<sup>(注9)</sup>石垣

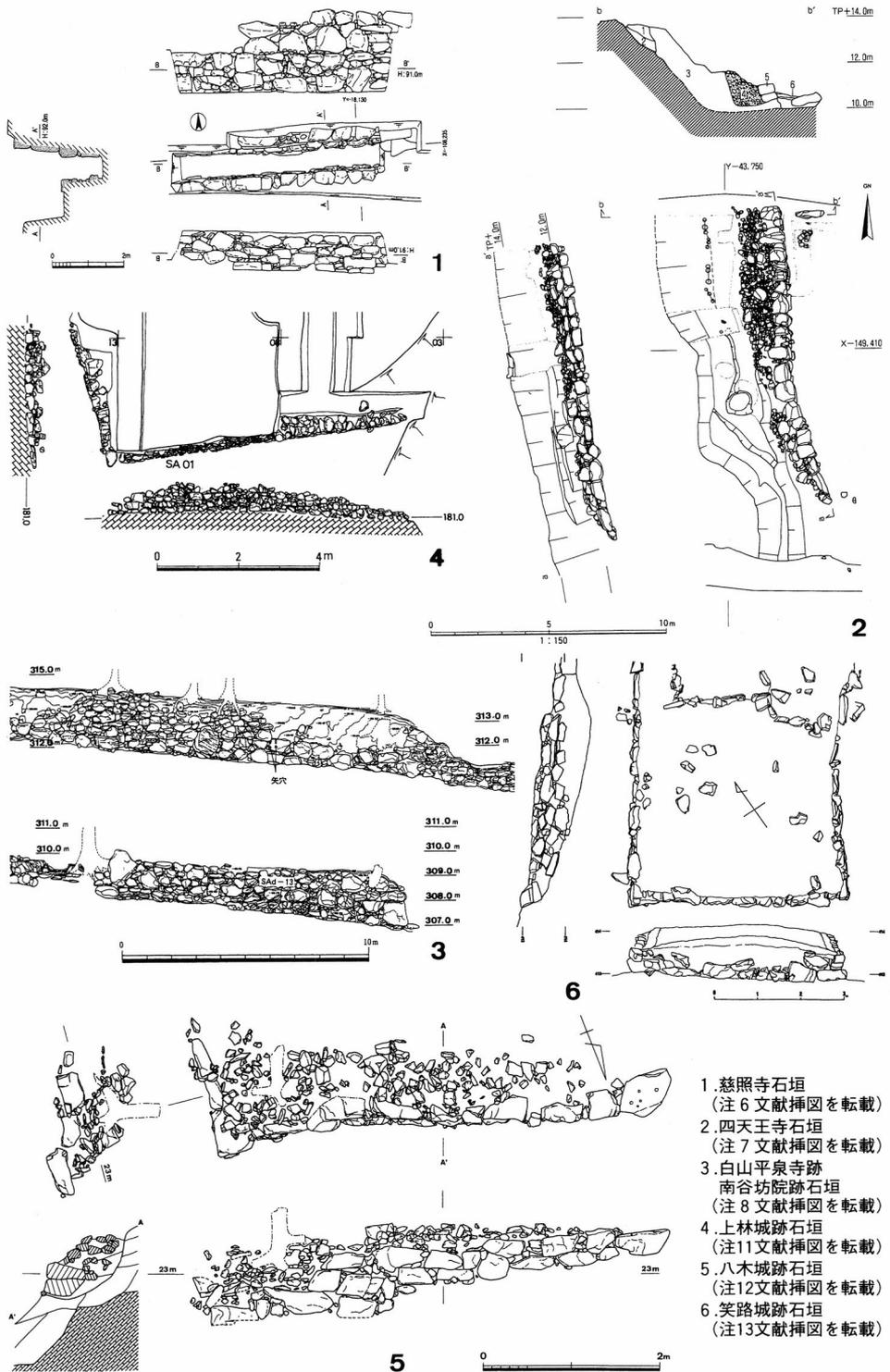
下城戸跡にみられる石垣は、隅角部に巨石を縦積みし、築石部にも巨石を横積みする。上記白山平泉寺跡本殿前の石垣と類似しており、白山平泉寺からの技術移転が想定されている。<sup>(注10)</sup>16世紀第3四半期の築造と考えられている。

##### ⑤京都府綾部市上林城跡<sup>(注11)</sup>石垣

本丸部分で石垣が検出されている。新旧2時期の石垣が検出されているが、新しい時期のものは残存状況が悪く、詳細は不明である。もう一方の石垣は、石材を平積みする。石面はあまり揃っていない。石積みは乱積みに近く、勾配は垂直に近い。礫による裏込めはされていない様子である。16世紀前半から中葉頃の築造とみられる。

##### ⑥京都府八木町八木城跡<sup>(注12)</sup>石垣

尾根の中腹に、地山の岩盤を削りだした基盤上に築かれる。あまり残存状況は良くないが、横目地を意識して自然石を平積みしている様子である。角礫による裏込めを施す。16世紀第4四半期にこの城を手中にした明智氏による築造と考えられる。



第9図 各遺跡検出石垣

1. 慈照寺石垣  
(注6文献挿図を転載)
2. 四天王寺石垣  
(注7文献挿図を転載)
3. 白山平泉寺跡  
南谷坊院跡石垣  
(注8文献挿図を転載)
4. 上林城跡石垣  
(注11文献挿図を転載)
5. 八木城跡石垣  
(注12文献挿図を転載)
6. 笑路城跡石垣  
(注13文献挿図を転載)

⑦京都府亀岡市笑路城跡石垣<sup>(注13)</sup>

山頂の本丸部分で、天守台の祖型とみられる石垣などの石積み遺構が検出されている。石材を平積みする。八木城跡と同じく、明智氏の手になるものか。

## 5. 小結

田辺城跡の舁形虎口状遺構では、先に記したように、南北両側辺に石垣の抜き取り痕跡がみられる。残存する石垣も、ほとんど下部のみの残存である。また、この遺構は大量の土砂で覆われていた。自然に崩壊して埋没したという状況ではない。人為的に破壊された状況を示すものであろう。関連する遺物は、ほとんど16世紀第3四半期までのものである。したがって、この時期までに破却されたものと考えられる。

さらに、この遺構には、上下2面の整地面がある。ある程度の存続期間を考えなければならぬ。暗渠排水溝に使用されていた瓦質土管の年代観からみれば、古くとも16世紀第2四半期を遡ることはない。

以上のようなことから、田辺城跡石垣の築造年代は、16世紀第2四半期後半から第3四半期初め頃とみるのが妥当ではないかと思われる。各地の石垣遺構との比較については、それぞれがかなり个性的であるためあまり有効ではないが、あえて類似するものを求めれば、大阪市四天王寺石垣が最も近いものと言えよう。石材・積み方・裏込めの状況など、共通点は多い。この石垣が16世紀第2四半期の築造であることを、上記の年代観の傍証としたい。

最後に、この田辺の地には、中世に田辺氏という在地有力者がいたとされる。しかし、今回調査した田辺城跡という遺跡が、この田辺氏の居城であるという根拠は何もない。また、今回検出した舁形虎口状遺構は、構造的に、確かに城郭的ではある。しかし、中世の瓦なども出土しており、一概に城と断定するのも問題である。このように、さまざまな問題はあるが、今回検出した石垣遺構が、数少ない中世後半期の整美な石垣であることには、なんら変わりはない。

(いしお・まさのぶ＝当センター調査第2課調査第1係主査調査員)

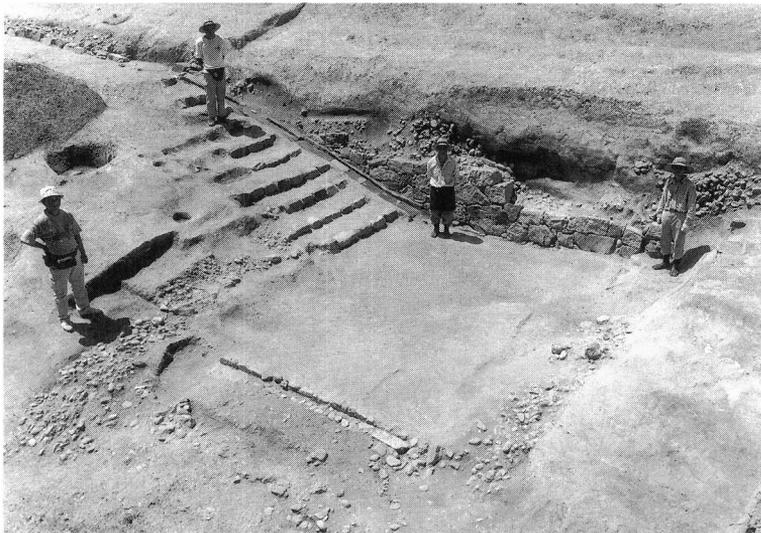
(ひきはら・しげはる＝当センター調査第2課調査第1係主任調査員)

注1 鷹野一太郎「田辺城跡」(『田辺町遺跡分布調査概報』田辺町教育委員会)1982

注2 石尾政信・杉本厚典「府道八幡木津バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第77冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1997

注3 小林謙一・佐川正敏「法隆寺出土古瓦速報(2)」(『伊何留我・法隆寺昭和資財帳調査概報』⑩小

- 学館) 1989
- 佐川正敏・花谷 浩・毛利光俊彦ほか『昭和資財帳 15 法隆寺の至宝・瓦』(小学館) 1992
- 注4 森下恵介・西崎卓也ほか「古市城跡発掘調査報告」(『奈良市埋蔵文化財調査報告』昭和55年度奈良市教育委員会) 1981
- 注5 佐藤亜聖「大和における瓦質土器の展開と画期」(『中近世土器の基礎研究』XI 日本中世土器研究会) 1996
- 注6 南 孝雄ほか「特別史跡特別名勝慈照寺庭園」(『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1996
- 注7 黒田慶一ほか「四天王寺旧境内遺跡の調査」(『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告』—1996年度—(財)大阪市文化財協会) 1999
- 注8 宝珍伸一郎ほか「白山平泉寺 南谷坊院跡発掘調査概報Ⅲ」(『勝山市埋蔵文化財調査報告』第10集 勝山市教育委員会) 1993
- 注9 北垣聡一郎「伝統的積み技法の成立とその変遷」(『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』第22冊 奈良県立橿原考古学研究所) 1999
- 注10 中井 均「安土築城前夜—主として寺院からみた石垣の系譜」(『織豊城郭』3号 織豊城郭研究会) 1996
- 注11 中村孝行「上林城跡第3次発掘調査概報」(『綾部市文化財発掘調査報告』第8集 綾部市教育委員会) 1981
- 注12 引原茂治ほか「国道479号バイパス関係遺跡平成5年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第62冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注13 竹岡 林ほか「丹波笑路城発掘調査報告」(『亀岡市文化財調査報告書』第7集 亀岡市教育委員会) 1978



第10図 舁形虎口状遺構(北東から)